

第1章 歴史的環境

斑鳩の位置 奈良県生駒郡斑鳩町は奈良盆地北西部の矢田丘陵南端付近に位置している。飛鳥から難波へ至る経路上に当たり、歴史上重要な地域であった。古墳や古代の斑鳩宮や法隆寺などの宮殿と寺院、近世の龍田藩陣屋などの歴史的遺産があり、斑鳩大塚古墳周辺にも多くの遺跡が存在する。そこで、発掘調査成果の報告に先立ち、古墳時代を中心に町内の遺跡を概観する。

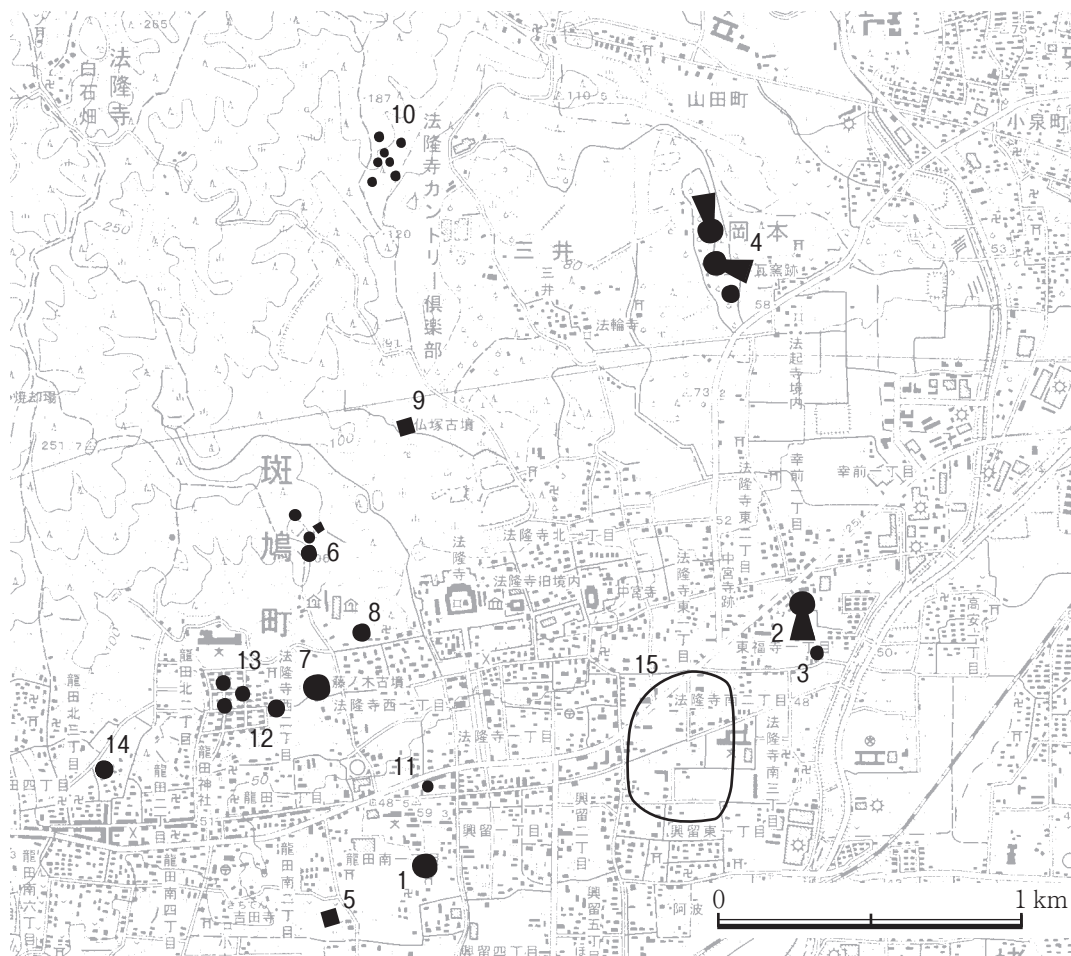
前期古墳 前期の古墳には駒塚古墳（2）がある。駒塚古墳は全長49m以上の前方後円墳である。二段築成で、葺石が確認されている。築造時期は前期末頃で、斑鳩町内では最古の古墳と考えられている（荒木2007、2011）。

中期古墳 中期古墳には瓦塚古墳群（4）がある。瓦塚古墳群は矢田丘陵から南に派生した一支脈の先端付近に営まれた古墳群で、前方後円墳2基、円墳1基からなる。1975年の調査により、1号墳は全長約97mの前方後円墳、2号墳は全長約95mの前方後円墳、3号墳は全長約30mの円墳であるとされた（関川編1976）。2012年には航空レーザー測量が実施され、測量図と赤色立体地図が作成された。その結果、3号墳は高まりが確認されたが、2号墳の前方部を造るために切断した丘陵残存部である可能性が出てきた（平田2014）。このほか、駒塚古墳の南に位置する調子丸古墳（3）、本書で報告する斑鳩大塚古墳（1）、斑鳩大塚古墳の西方に位置する戸垣山古墳（5）などが中期古墳として挙げられる。

後期古墳 藤ノ木古墳（7）は後期に築造された直径約50m、高さ約9mの円墳である。南東に開口する全長約14mの両袖式横穴式石室を有し、二上山産白色凝灰岩製の家形石棺が確認された。石室内からは金銅製の馬具、石棺内からは冠、銅鏡、刀剣類、ガラス玉など1万数千点にのぼる副葬品が出土した。葺石は認められず、墳丘裾部を中心に円筒埴輪が巡らされていたと推定される（勝部ほか編1990、前園ほか編1995、平田2008）。

春日古墳（8）は藤ノ木古墳の北東約150m地点に位置する古墳で、三次元レーザー測量や過去の立会調査等から、直径30mの円墳と推定される。墳丘南側斜面に2個の大型石材が確認され、石室羨道部の一部と考えられる（平田2013）。また、法隆寺の北方には仏塚古墳（9）がある。一辺23mの方墳で、埋葬施設は両袖式の横穴式石室である。石室内からは陶棺片などが出土している（河上・関川1977）。

終末期古墳 龍田神社北方の裏山には3基の終末期古墳からなる竜田御坊山古墳群（13）が存在した。1・2号墳の墳丘規模は不明だが、1号墳では金銅製環付六花形座金具が採集されている。3号墳は全長8mの円墳で、横口式石槨内に黒漆塗りの陶棺が納められ、男性の人骨1体と三彩有蓋円面硯・ガラス製管状品・琥珀製枕などが出土しており、7世紀中頃の造営とされる（泉森編1977）。その他には甲塚古墳（12）や神代古墳（14）がある。甲塚古墳は2016年8月に奈良大学が測量調査を行い、直径30m前後の円墳と考えられる。山寄せの立地から、終末期古墳の可能性が高い。



国土地理院発行 2万5千分の1 地形図「信貴山」を使用

- 1 斑鳩大塚古墳 2 駒塚古墳 3 調子丸古墳 4 瓦塚古墳群 5 戸垣山古墳
6 寺山古墳群 7 藤ノ木古墳 8 春日古墳 9 仏塚古墳 10 三井古墳群
11 亀塚古墳 12 甲塚古墳 13 竜田御坊山古墳群 14 神代古墳 15 酒ノ免遺跡

図1 斑鳩大塚古墳周辺の古墳時代遺跡分布図 1:25,000

その他の遺跡 古墳以外の遺跡として、集落遺跡の酒ノ免遺跡（15）がある。酒ノ免遺跡は20次以上にわたって調査が行われ、50棟以上の掘立柱建物跡が検出された（藤井1986）。奈良県下でも有数の集落遺跡である。

なお、これまでの斑鳩大塚古墳の調査では、古代から中世にかけての遺物も多数出土している。大塚古墳の南東には五百井遺跡があり、1997年の調査では中世の溝や井戸を確認した（斑鳩町教育委員会1998）。延久二（1070）年の「興福寺大和国雑役免付帳」によれば、平安時代中期の五百井・服部の地域には興福寺領庄園服庄が展開していたとされ（斑鳩町1979）、これらの出土遺物との関連が想定される。（和田健嗣）

第2章 調査の経緯と経過

1 過去の調査

斑鳩大塚古墳については、古くは野淵龍潜による『大和国古墳墓取調書』に記載があるが（秋山編1985）、本格的な調査は1954年の忠霊塔建設工事に伴うものが最初である。調査では埋葬施設である粘土槨が検出され、銅鏡、筒形銅器、石釧など副葬品の一部が出土した。また、当時の理解では直径約35m、高さ約4mの円墳で、円筒埴輪列、葺石の存在は確認されたが、周濠は持たないとされていた（北野1958）。

しかし、その後発掘調査は行われず、古墳を今後も保存・活用するためには、詳細な情報を把握する必要があった。奈良大学文学部文化財学科は2013年8月19日から9月3日にかけて測量調査を行い、さらに11月に地中レーダー探査を行った（梅澤・清水・中村・豊島2014）。その結果、本古墳が周濠を伴う前方後円墳である可能性が浮上したため、前方部と周濠の有無を確認する必要が生じた。そこで、2014年3月から1ヶ月間、斑鳩町教育委員会が主体となり、奈良大学文化財学科の協力で古墳周辺の発掘調査を行った。3ヶ所の調査区を設定した結果、第1調査区では幅約8mの周濠を確認できたが、他の調査区では、前方部や周濠を確認できなかった（豊島編2015）。

また、前方部の確認を最重要課題として、2015年3月2日から4月12日にかけて第2次調査を行った。墳丘東側に設定した第6調査区で前方部の一部とくびれ部を確認したが、前方部の規模まで確定できなかった。このほか、墳丘北側の第4・5調査区で周濠を確認し、墳丘南側の第7調査区では、調査区全体が周濠内であることが判明した（豊島・間所編2016）。（岩永 祐貴）

2 調査の経過

調査の経過 2014年度の成果をふまえ、前方部の規模の確認を最重要課題として2015年度の調査を計画した。調査区は昨年度、前方部を確認した第6調査区の一部と繋ぐ形でT字状の第8調査区を設定し、墳丘南西側の周濠を確認する第9調査区を加えた。また、調査の過程で第10調査区を追加した。

今回の調査は斑鳩町教育委員会と奈良大学文化財学科が共同で行った。調査期間は休日と雨天を除く2016年2月19日から3月31日までの計29日間で、経過は以下の通りである。

- 2月19日 各調査区を設定。掘削作業開始。
- 2月26日 第9調査区で周濠埋土らしき土層を確認。
- 2月27日 第8調査区一部拡張。
- 3月1日 くびれ部と墳丘を検出するため、第8調査区を拡張。
- 3月2日 第8調査区をさらに南へ拡張。



1. 発掘開始



2. 第8調査区の発掘風景



3. 第9調査区の発掘風景



4. 平面図作成の様子



5. 断面図作成の様子



6. くびれ部検出の様子



7. 埋戻し作業



8. 遺物写真撮影の様子

図2 調査の様子

3月5日 第10調査区を設定し、掘削作業開始。
 3月7日 第8調査区をさらに拡張。
 3月10日 第8調査区西側を拡張。
 3月11日 第8調査区写真撮影。第10調査区を完掘。写真撮影。
 3月12日 第9調査区を周濠端確認のため拡張。
 3月16日 第9調査区で周濠端を確認。
 3月17日 第9調査区完掘。写真撮影。第10調査区埋戻し開始。
 3月20日 第8・9調査区埋戻し開始。
 3月25日 第8調査区拡張区で南側のくびれ部を確認。
 3月31日 埋戻し作業および撤収作業を行い、調査終了。

遺物整理と報告書作成 発掘調査の終了後、2016年4月から翌年3月にかけて、奈良大学文化財学科で遺物整理および報告書作成を行った。なお、今回出土した遺物の一部は、斑鳩文化財センター速報展『斑鳩の文化財展—平成27年度調査速報展—』にて、2016年7月21日から8月9日まで公開した。

発掘調査参加者 今回の発掘調査の参加者は以下のとおりである（括弧内の学年は2016年3月当時）。

豊島直博（奈良大学文学部准教授）、荒木浩司（斑鳩町教育委員会）、河村萬里、高左右 裕（以上、大学院修士2回生）、岡 紗佑里、小堀 僚、土橋明梨紗、間所克仁、宮畑勇希（以上、大学院修士1回生）、岩永祐貴、梅木梨沙、尾崎綾亮、柴田拓也、土屋博史、和田健嗣、和田直己（以上、文学部4回生）、伊田 葵、木ノ内 瞭、中谷光里、新里 遥、早川明優加、古林舞香、松森多恵、水落智佳、南 貴匡、三輪 望、柳澤 楓（以上、文学部3回生）、泉 真奈、磯橋祐実、今村早香、上野龍彦、加藤優花、川尻 大、岸本真祐子、木原雅貴、桑原一徳、後藤寛子、田口裕貴、中野将輝、西村謙太、花木大地、廣瀬史弥、松澤健太、森田愛理、山下愛莉（以上、文学部2回生）、朝田智春、栗野翔太、石丸 彩、井本 葵、桂川卓也、加納大誉、河原秋桜、金原 駿、北川直人、鈴木郁哉、戸塚絢子、西山いずみ、馬場彩加、藤倉 蓮、星谷佳輝、松本優歌、三輪真大、森田彩未、吉田芽生（以上、文学部1回生）、大西幹男（通信教育部卒業生）、嘉戸愉歩（熊本大学文学部2回生）、内田 徹（奈良大学附属高校生）。

（岩永）

第3章 発掘調査の成果

1 調査区の配置

2013年度の調査では、現存する墳丘の北側と北東側に3ヵ所の調査区を設け、第1調査区で周濠SD01を確認した。2014年度の調査では、墳丘の北側と北東側、東側、南側に4ヵ所の調査区を設け、第4調査区、第5調査区、第6調査区で周濠SD01、第6調査区で北側のくびれ部を確認した。なお、墳丘南側の第7調査区は調査区全体が周濠SD01に入ることが判明した。

今年度は前方部の規模と墳丘南西側の周濠の確認を目指し、墳丘東側に1ヵ所（第8調査区）と南側に1ヵ所（第9調査区）の調査区を設定した。また、第8調査区の掘削を進める過程で、別の場所で墳丘・周濠の有無を確認する必要があるため、第10調査区を追加で設定した。以下、各調査区の成果について述べていきたい。（中谷光里）

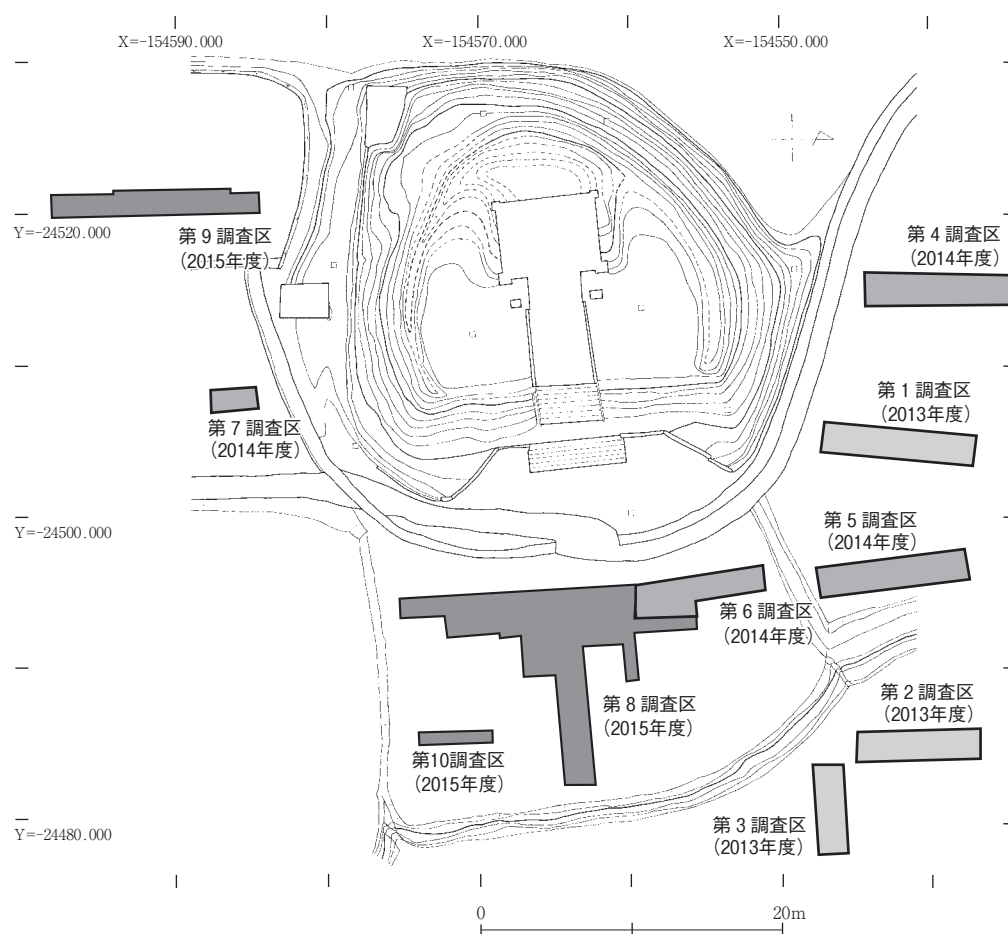


図3 調査区配置図 1:500

2 第8調査区（図4・5、図版1～3）

位置と目的 第8調査区は、昨年度の第6調査区において検出した斑鳩大塚古墳の前方部状施設の規模、くびれ部の幅の確定を目的として、墳丘の東側に設定した。当初は南北14m、東西13.5m、幅1.5m、面積23.2㎡の調査区をT字形に設定した。しかし調査を進める過程で、現状の範囲では南側くびれ部の検出が困難であり、さらに墳端東側の検出が必要であると判断したため、東、西、南の各方向へ拡張を重ねた結果、最終的な調査面積は69㎡となった。

基本層序 上から順に、表土である黒褐色砂質土（厚さ約20cm）、近世の耕作土である茶褐色砂質土（厚さ約20cm）、12世紀から13世紀の遺物包含層である茶褐色粘性砂質土（厚さ約25cm）、古代～中世の遺物包含層である灰茶色砂質土（厚さ約25cm）となり、黄褐色砂質土の地山に至る。地山上面の標高は約45.9mである。

検出遺構 検出遺構には墳丘、周濠、土坑、柱穴、近世以降の耕作溝などがある。

墳丘は南北トレンチの西壁より東へ約4.7mまで検出した。墳端部分については後述の土坑SK01とSK04によって大きく削平されていた。

周濠SD01については昨年度の調査同様、完掘はせず、部分的に設定したサブトレンチにより底を確認した。検出面から最深部までの深さは約35cmである。埋土は上層が灰茶色粘性砂質土、中層が暗灰色砂質土、下層が明灰茶色砂質土である。墳端部分から調査区の東に向かって立ち上がる地山部分の間で確認した幅は約4.4mであった。

土坑SK01の直径は約2.5mと推定される。埋土は、上層が黒茶褐色砂質土、中層が橙灰色粘性砂質土、下層が粘土ブロックの混じる黄白色粘質土である。埋土上層の東部分から、約20個の礫が出土した。出土遺物は瓦器碗が中心である。また、SK01埋土上層からは蓋形埴輪の破片が出土した。土坑SK04の埋土は暗灰茶色砂質土である。出土遺物はSK01と同様に瓦器碗が多い。

南北トレンチの南端では墳丘と周濠の境界を検出した。北端部に設けた2ヵ所の拡張区においても、墳丘と周濠の境界を検出し、墳丘が細砂系の土による地山整形であることを確認した。南北トレンチの南端から、墳丘は北へ約7m地点まで巡り、この地点から墳丘上端が東に向かって屈曲する。南北調査区東壁で若干の地山の落ち込みも確認したため、くびれ部であると想定した。さらに、くびれ部の続きを探るため東へ拡張したが、中世以降の土坑により削平されており、確認できなかった。しかし、東西トレンチと拡張区で確認した墳丘部分とくびれ部の位置関係から、東側に突出する幅約11.6m、長さ約3.6mの造り出しがあったと想定される。

墳丘上面は中世以降の耕作溝によって削平されている。調査区全体から埴輪片が多数出土した。また、周濠SD01の埋土からは埴輪片、須恵器片などが出土した。（田口裕貴・松澤健太）

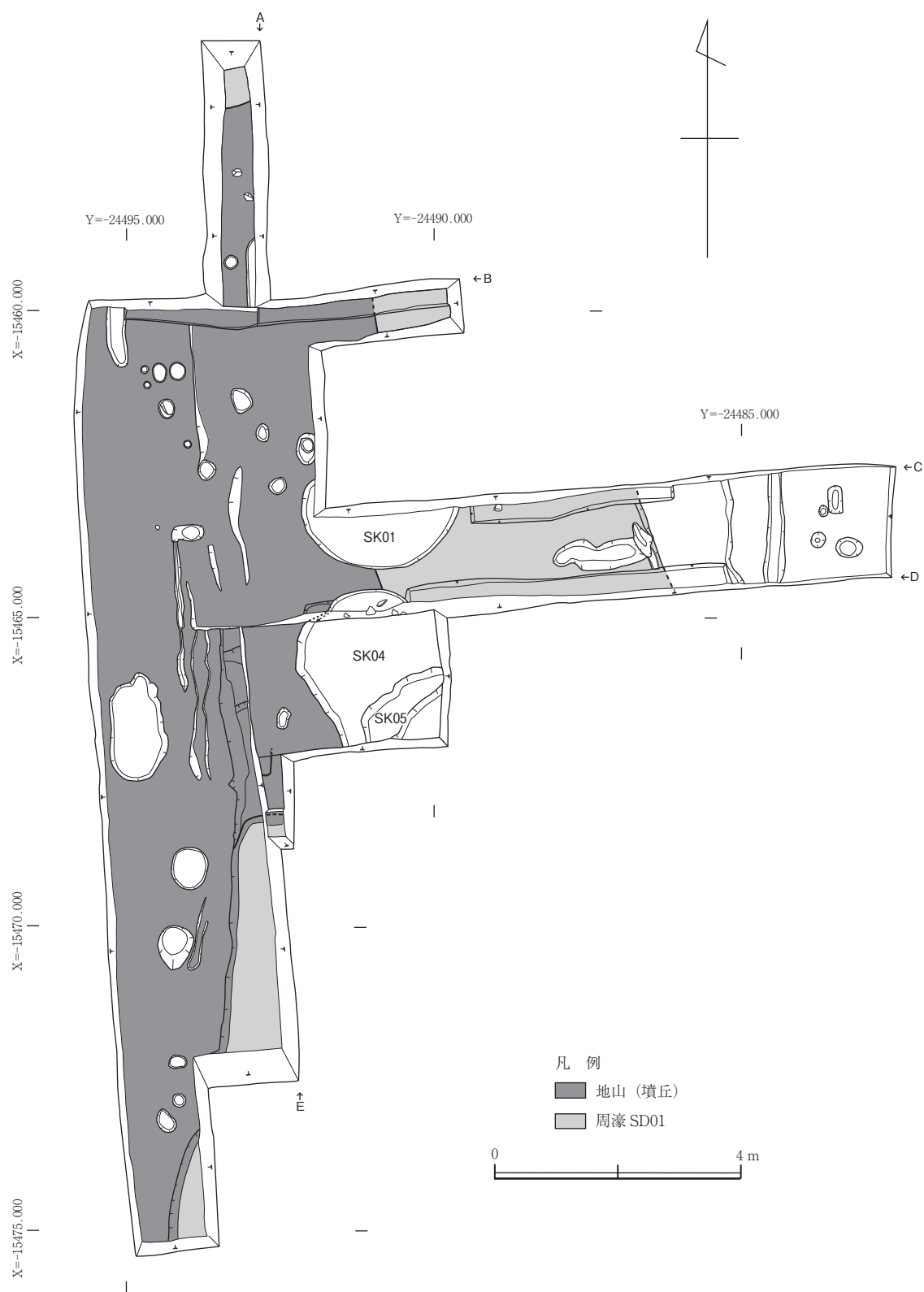


図4 第8調査区平面図 1:100

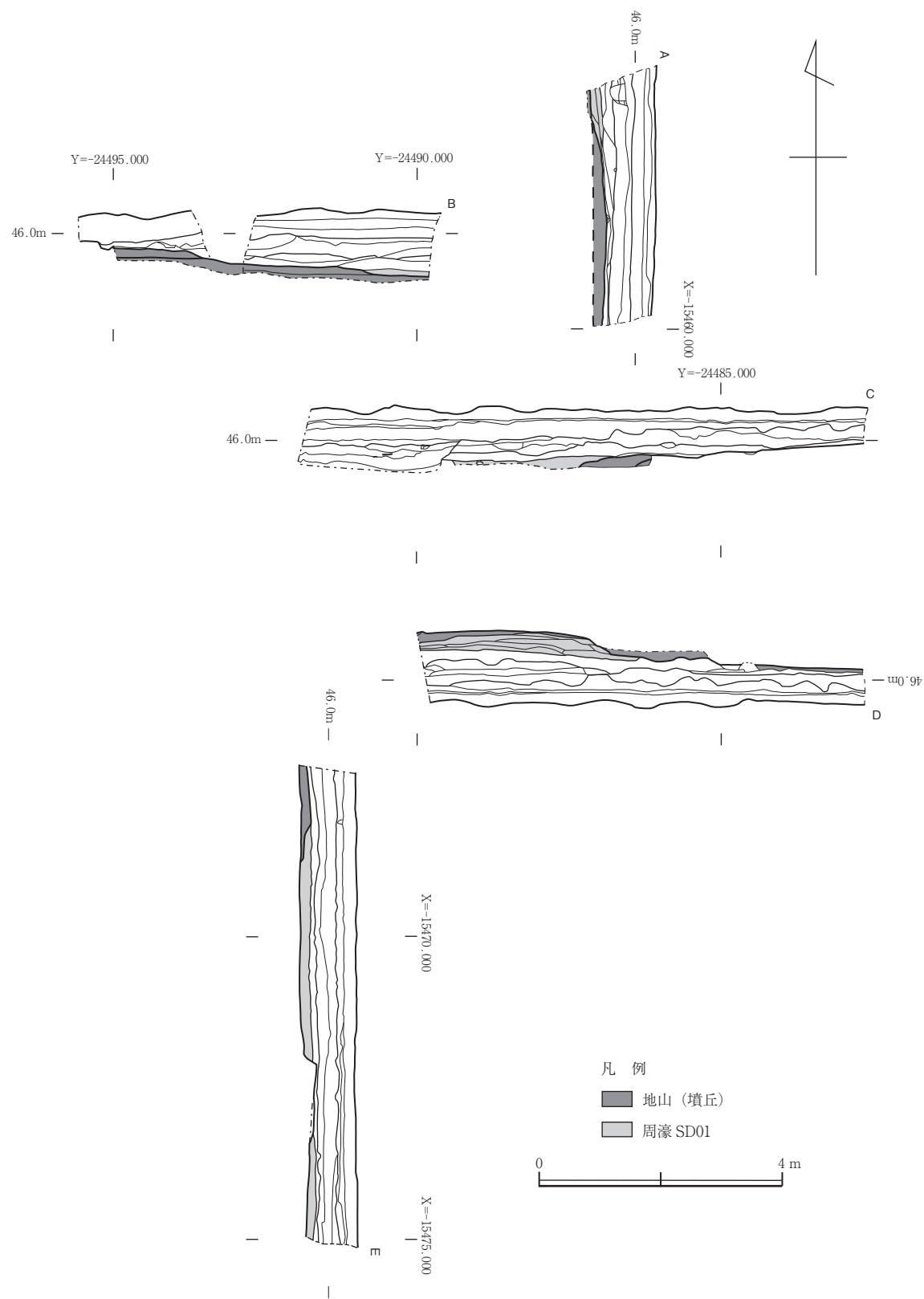


図 5 第 8 調査区断面図 1 : 100

3 第9調査区（図6、図版4・5－1）

位置と目的 第9調査区は南側の墳丘と周濠の確認を目的とした調査区である。墳丘南側では2015年度に第7調査区を設けたが、調査区全体が周濠の範囲内であった。また、第9調査区周辺の墳丘は北側に削平されており、墳丘基底部が残存する可能性があった。調査区は南北13.5m、東西1.5mで設定したが、雨水の浸食により西側の一部が崩壊したため西側に拡張し、最終的な調査面積は22㎡となった。

基本層序と遺構 基本層序と遺構について、上層から順に述べていきたい。1層目は暗灰色砂質土および灰褐色砂質土の耕作土で、厚さ20～25cmである。2層目は明灰色砂質土で、厚さ5cm未満の薄い耕作土である。上面で南北方向の耕作溝を検出した。また、調査区北端部で堤状の高まりとともに近代まで機能した上層の池を北端から約1mまで検出した。池からは下駄や中世瓦、近世陶磁器などが出土した。3層目は暗灰色砂質土および灰褐色砂質土で、厚さ約10cmの耕作土である。東西、南北方向の耕作溝を検出したが、東西溝が多い。出土遺物から、幕末期～近代初頭と考えられる。

4層目は明茶褐色砂質土および灰黄色砂質土で、調査区南側で長さ約5mにわたって検出した。厚さ約30cmでしまりがよく、整地層と考えられる。整地層からは多くの7～8世紀の土器と、少量の13世紀頃の土器が出土した。また、径約30cmの根石らしき石も出土した。整地層の上面で東西方向の溝を複数検出した。溝からは近世の遺物が出土した。

さらに、調査区北半で池SG01を検出した。SG01の埋土は上層と下層に大別され、上層は橙灰色砂質土、灰褐色砂質土、黄褐色砂質土で、全体に斜めに堆積している。下層は青灰色粘土で、水平堆積である。上層からは18世紀代の遺物、下層からは中世後半期の遺物が出土し、SG01の埋没時期は2時期に分かれると考えられる。池SG01は湧水が激しく、検出面から80cm以上掘り下げたが、底は確認できなかった。SG01によって墳端も削平されたと考えられる。

調査区東半部は整地土および池SG01の上面で掘削を止め、西壁沿いのサブトレンチで下層を確認した。整地土の下層は灰色粗砂の地山である。地山上面で、長さ約5mにわたって周濠SD01を確認した。SD01の埋土は灰茶褐色砂質土及び橙灰色砂質土で、検出面からの深さは約25cmである。埋土からは7世紀前半の土器や埴輪が多く出土した。

遺構の性格 周濠SD01の出土遺物は5世紀代の埴輪と7世紀前半の土器群に大きく分けられる。7世紀の土器群は斑鳩宮や法隆寺など上宮王家による開発期にあたり、斑鳩大塚古墳のある場所は開発の想定域を提示した酒井プラン（酒井2006）に含まれる。これらの土器群は古代における開発の一端を示すと考えられる。

整地土および池SG01の性格として、福安寺の存在があげられる。本調査区南端から20mほど南下した場所に現在伊弉冊命神社が鎮座する。伊弉冊命神社は元々この地にあった福安寺の鎮守である。福安寺は保延2年（1136）には存在しており、本堂、東之坊、西之坊、観音堂、羅刹女堂、湯屋などがあった（斑鳩町史編集委員会1979）。葛本家に伝わる江戸期の福安寺伽藍配置図

には寺域北辺及び西辺部に水堀が存在し、寺域側から緩やかに堀底へ向かって傾斜する様子が描かれている（大宮2004）。この様相は今回検出した池SG01と位置や堆積状況が類似することから、池SG01は福安寺を囲む濠である可能性がある。濠は中世前半頃には掘削されており、中世後半期に狭められたと考えられる。また、整地土は該当位置に描かれた東之坊に関連する可能性が高い。ただし、調査面積が狭く、全体の様相が把握できなかったため、福安寺の様相については今後の課題としたい。

本調査区では古墳に伴う遺構は周濠の南北約5m分が残るにすぎなかった。墳丘南側の古墳に伴う遺構について詳しい情報を得ることができなかったが、7世紀から近世に至る土地利用の様子が見て取れたことは一定の成果である。

（小堀 僚）

4 第10調査区

（図7、図版5-2）

位置と目的 当初は第8調査区のみで前方部の規模と周濠の有無を解明しようと試みたが、調査中、前方部の規模が予想外に小さいことが明らかになってきた。そこで、墳丘と周濠の範囲を確定すべく、第8調査区の南に第10調査区を設けた。南北5m、東西1mで、面積は5㎡である。

基本層序 上から順に、表土である暗灰色砂質土（厚さ約15cm）、近世以降の耕作土である灰褐色砂質土（厚さ約25cm）、古代以降の遺物含有層である茶

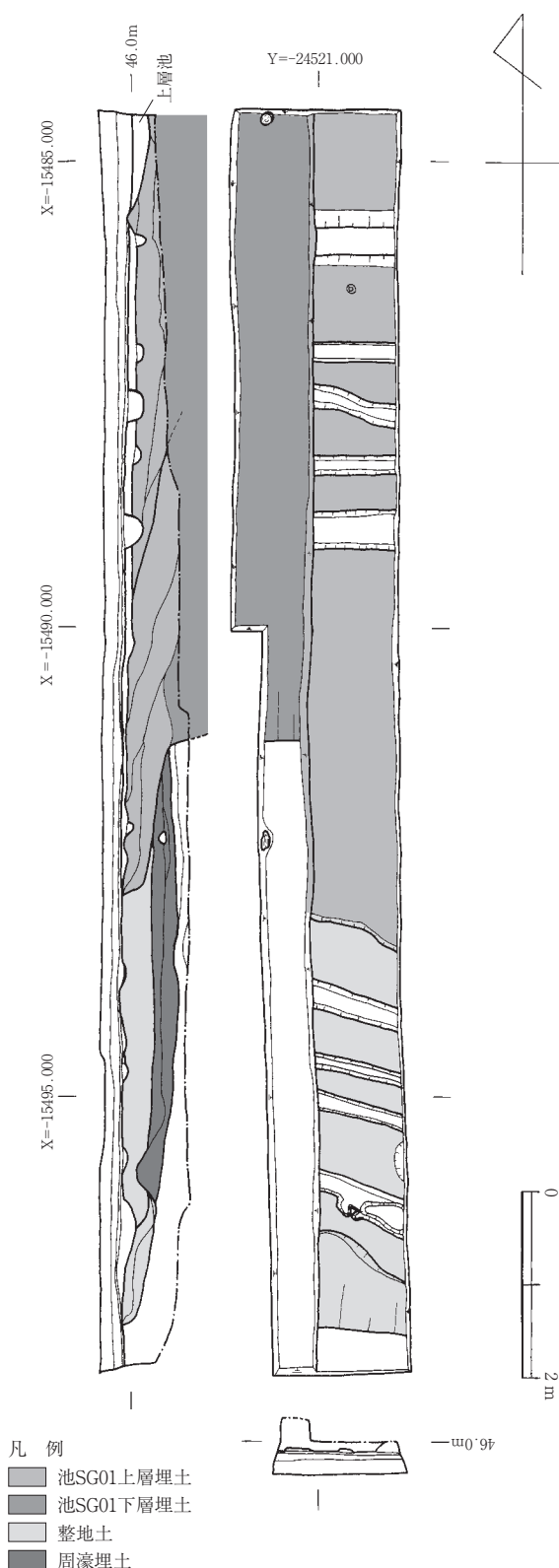


図6 第9調査区平面図・断面図 1:80

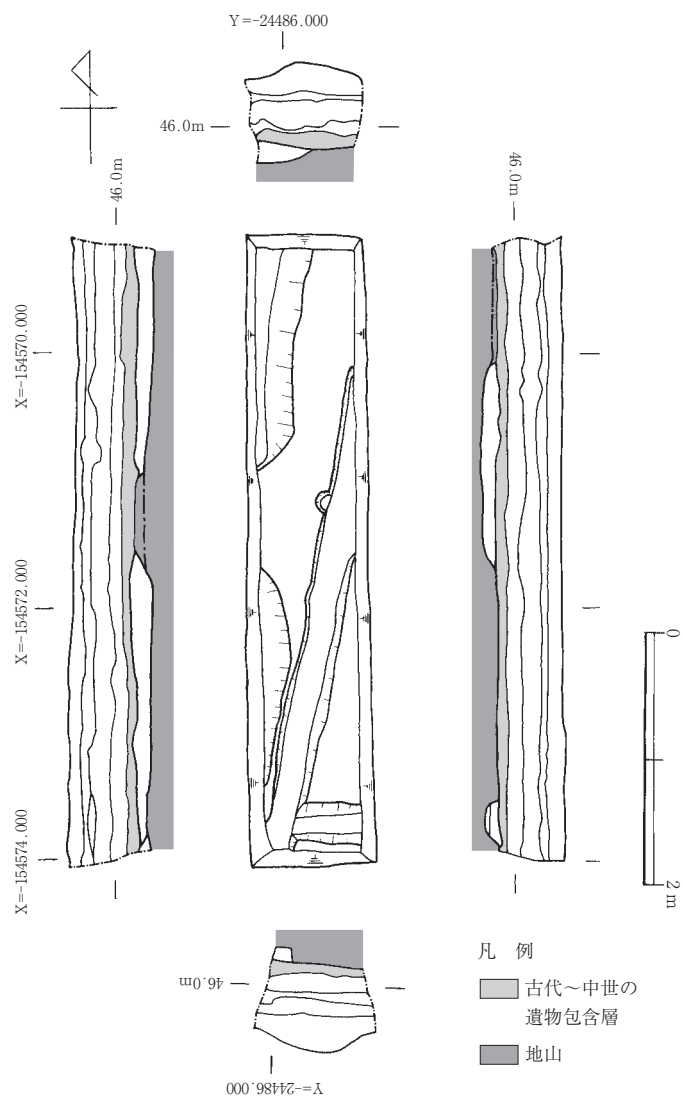


図7 第10調査区平面図・断面図 1:60

褐色砂質土（厚さ約10cm）となり、地山である灰黄色砂質土に至る。地山上面の標高は約45.8mである。

検出遺構 地山上面で幅約30cmの東西溝と南北溝をそれぞれ1条検出した。溝の埋土は耕作土と同じ灰褐色砂質土のため、近世以降の耕作溝と考えられる。また、調査区西壁付近の北側と南側で土坑らしき皿状の落ち込みを2基検出したが、大半は調査区外にあるため、規模は不明である。南側の落ち込みから黒色土器（図10-6）が出土した。本調査区では墳丘、周濠は確認できなかった。

（和田直己）

第4章 出土遺物

1 出土遺物の種類と量

今回の発掘調査では3つの調査区から整理箱10箱分の遺物が出土した。調査区別の内訳は第8調査区が7箱と最も多く、第9調査区が2箱、第10調査区が1箱である。土器は各調査区とも土師器、須恵器、瓦器が多く認められ、わずかに陶磁器を含む。埴輪は第8調査区からの出土が大半で、円筒埴輪が多く、形象埴輪が2点ある。その他の遺物には、瓦が少量と下駄が1点ある。

(古林舞香)

2 円筒埴輪 (図8、図版6)

今回の調査では整理箱1箱分の埴輪が出土した。その大半が円筒埴輪で、第8調査区からの出土が多い。円筒埴輪の多くは破片であり、回転復元が可能なものは少数である。以下、おもな個体について詳細を述べる。

円筒埴輪 1～4は胴部片である。外面調整はハケ、内面調整はナデ、ハケである。1は外面にヨコハケを施し、一部にタテハケが施される。内面はナデ調整を施し、ヨコハケを一部分に施す。突帯は突出度が高く、丁寧なつくりである。2は外面にヨコハケを施し、内面はナデ調整である。3は内面にタテハケが施される。2・3ともに突帯の突出度は1よりも低い。

5は円筒埴輪の底部片である。底部径は18.8cmに復元できる。底面からほぼ垂直に立ち上がる。外面は摩滅しているものの、一部タテハケが残る。

朝顔形円筒埴輪 6は朝顔形埴輪の口縁部である。外上方にのびた後に端部付近で外反する。器厚は薄く、ナデ調整を施す。7・8は頸部から口縁部の破片である。7は口縁部突帯が剥離している。8は比較的薄手のもので、内面にタテハケ調整が施される。接合方法は内傾接合である。

埴輪の特徴 調整方法はヨコハケ調整のみのものと、タテハケ調整のものが混在する。薄く焼成が良好な資料にヨコハケ調整が多くみられる。いずれも胎土に金雲母を含み、白色粒が多く混じる。また、すべての断面が黒褐色を呈する土師質のものである。

黒班がみられるものの、焼成が良好かつ器厚の薄い資料が第8調査区で集中して出土している。突帯の形状や外面調整などから川西宏幸編年のⅢ期に位置づけられる(川西1978)。埴輪の品質によって樹立された位置が異なると推定されるので、今後の調査で明らかにしたい。

(泉 真奈)

3 形象埴輪 (図9、図版7-1・2)

形象埴輪では蓋形埴輪のほか、器種不明のものが多くある。多くは破片で遺存状態は悪い。いずれも第8調査区から出土した。以下、おもな個体について報告する。

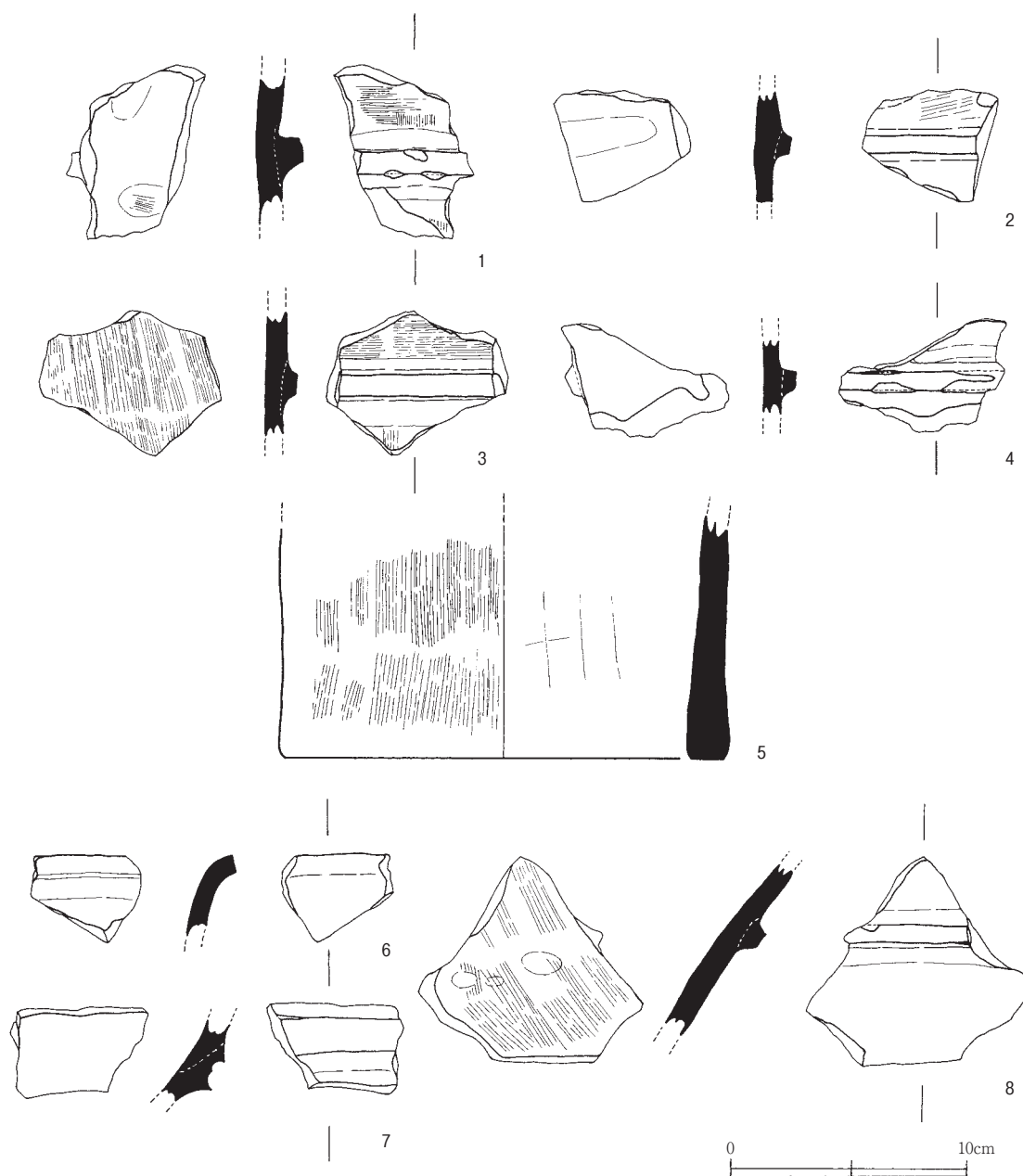


図8 円筒埴輪実測図 1:3

1・2は蓋形埴輪である。1は笠の下半部で、縦方向に2条、横方向に1条の沈線が入る。2条の沈線を互い違いに配置している。内外面ともナデ調整を施す。円筒部との接合面には刻み目を施す。2は蓋形埴輪の軸受け部である。やや内傾するが、まっすぐに立ち上がる。口縁部外側に粘土を貼り付けており、内外面ともにナデ調整を施す。

これらの蓋形埴輪は笠下半部の沈線のあり方や軸受部の形態から、小栗明彦による編年の3段階に位置づけられる（小栗2007）。どちらも第8調査区内より出土したことから、造出しには一定数の蓋形埴輪が樹立されていたと考えられる。（泉）



図9 形象埴輪実測図 1 : 3

4 土 器 (図10、図版7・8)

今回の調査では、土師器、須恵器、黒色土器、瓦器、陶器、磁器などが整理箱9箱分出土した。調査区別にみると、第8調査区から最も多い6箱分、第9調査区から2箱分、第10調査区から1箱分が出土している。

このうち、周濠の埋没時期や、主要な遺構の年代の手がかりとなる土器のほか、遺物包含層から出土した遺存状態のよいものについて報告する。なお、分類と編年については、須恵器は陶邑編年（田辺1966）、土師器皿は伊野編年（伊野1995）、黒色土器は森編年（森1995）、瓦器碗は川越編年（川越1983）に準拠した。

須 恵 器 1、2は第9調査区周濠埋土から出土した。1は坏身である。復元口径は10.2cmで残存高は3.1cmである。外面には回転ナデと回転ヘラケズリ、内面には回転ナデを施す。受部の立ち上がりは低く、内傾する。胎土は密で、焼成は良好。色調は内面が暗灰色、外面が灰色を呈する。陶邑編年のTK209型式期に位置付けられ、時期は7世紀前半と考えられる。2は甕である。復元頸部径は4.5cmで、胴部の最大復元径は10.0cmである。残存高は6.4cmで、外面には回転ナデと回転ヘラケズリ、内面には回転ナデを施す。胎土は密で白色粒を含む。焼成は良好。色調は内外面共に淡い灰色を呈する。坏身と同様、TK209型式期に位置付けられ、7世紀前半と考えられる。

土 師 器 3～5は皿である。3は第8調査区南北トレンチの遺物包含層から出土した。復元口径は10.2cm、器高は1.5cmである。調整は内外面ともに上半部はヨコナデ、下半部にユビオサエを施す。口縁部は二段にわたってヨコナデをし、端部は外反する。胎土は密で、焼成は良好。

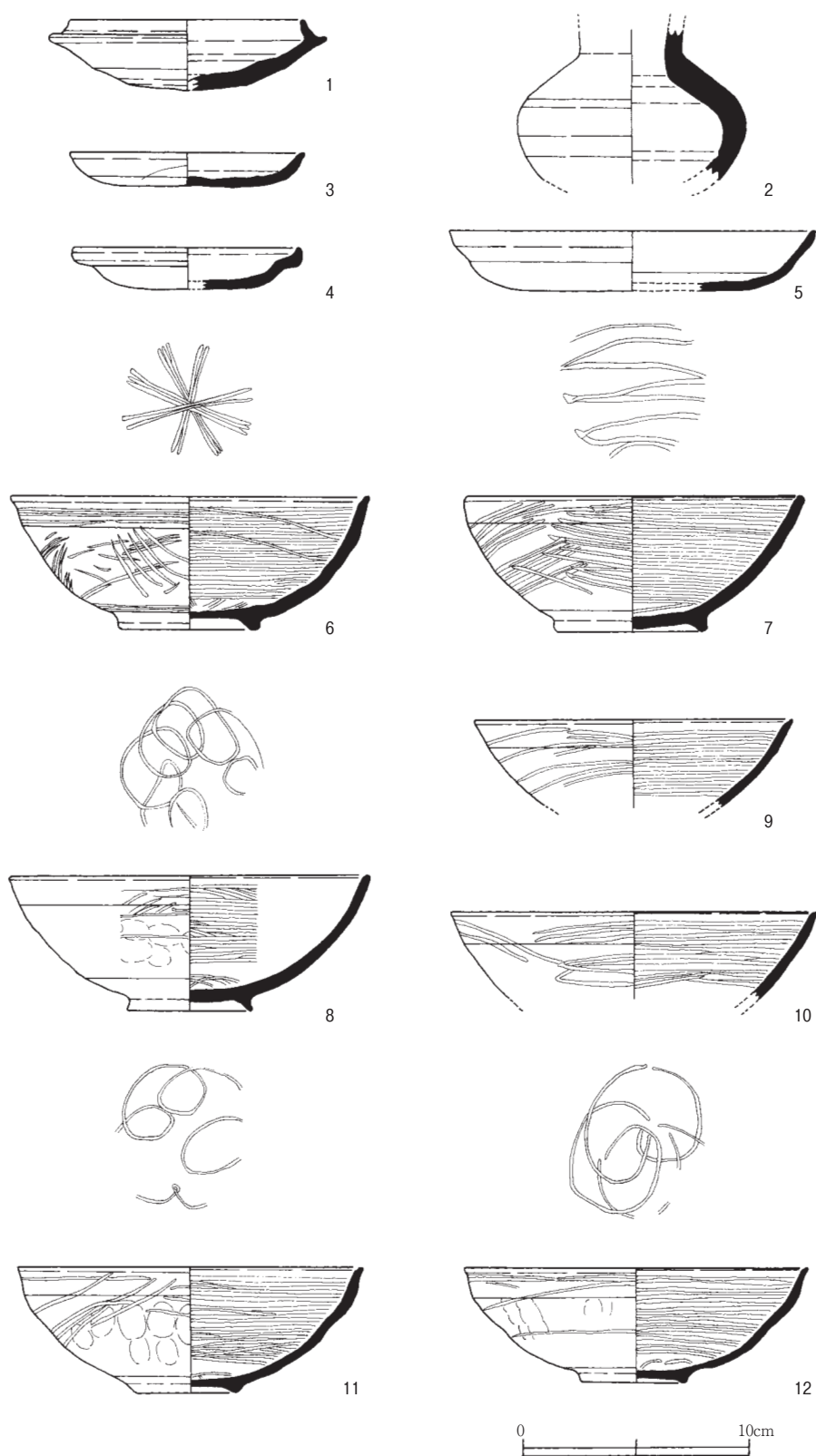


図10 土器実測図 1 : 3

色調は、内外面とも淡い橙色で、断面は黒色を呈する。伊野編年のAaタイプに位置付けられ、時期は11世紀から12世紀初頭と考えられる。4は第8調査区南北トレンチの遺物包含層から出土した、いわゆる「ての字状口縁」の皿である。復元口径は10.0cmで、残存高は2.8cm。外面調整はヨコナデとユビオサエ、内面はヨコナデを施す。胎土は密で焼成は良好。色調は内外面ともに灰褐色である。器壁が4mmで、Bcタイプに位置付けられる。時期は11世紀末から12世紀初頭と考えられる。5は第8調査区土坑SK01から出土した。復元口径は15.9cmで、残存高は2.6cmである。口縁部外面に2段ナデを施す。胎土は密で、焼成は良好。色調は内外面ともに淡い橙色を呈し、外面の底部と口縁部内側の一部が灰色を呈する。Abタイプに位置付けられ、時期は12世紀頃と考えられる。

黒色土器 6は第10調査区南側の落ち込みから出土した椀である。復元口径は15.5cmで、器高は5.8cmである。外面調整は分割ミガキが密に施される可能性があるが、遺存状態が悪いため現状を図示した。内面のミガキは密に施されており、見込みには2本あるいは3本を1単位としたミガキが放射状に8方向施されている。胎土は密で、焼成は良好。色調は内外面とも黒色を呈する。森編年の畿内系V類IXに位置付けられ、時期は11世紀後半と考えられる。

瓦 器 7～12は椀である。7は第8調査区南北トレンチ灰茶褐色砂質土から出土した。ほぼ完形で、口径は14.7cmで器高は6.0cmである。外面には分割ミガキが密に施され、内面のミガキも密で、見込みにはジグザグ状のミガキが施される。口縁部内側には沈線が施される。胎土は密で、焼成は良好。色調は内外面ともに灰色を呈している。川越編年の第Ⅰ段階C型式に位置付けられ、時期は11世紀後半と考えられる。8は第8調査区南北トレンチ遺物包含層から出土した。復元口径は14.2cmで器高は5.9cmである。外面には分割ミガキが施され、内面のミガキは密で、見込みには連結輪状のミガキが施される。口縁部内側端部には沈線が施され、高台は外湾状に開く。胎土は密で、焼成は良好。色調は暗灰色を呈する。第Ⅱ段階A型式に位置付けられ、時期は12世紀初頭と考えられる。

9、10は第8調査区SK04から出土した。9は復元口径14.0cm、残存高は4.2cmである。外面には分割ミガキが施され、内面のミガキは密である。口縁部内側端部には沈線が施される。胎土は密で、焼成は良好。色調は暗灰色を呈する。第Ⅱ段階B型式に位置付けられる。10は復元口径16.1cmで残存高は3.9cmである。外面には分割ミガキが施され、内面のミガキは密である。口縁部内側端部には沈線が施されている。胎土は密で、焼成は良好。色調は暗灰色を呈する。第Ⅱ段階B型式に位置付けられ、時期は9、10ともに12世紀前半から中頃と考えられる。

11、12は第8調査区SK05から出土した。11は復元口径15.1cmで器高は5.5cmである。外面には分割ミガキが施され、内面のミガキは密で、見込みには連結輪状のミガキが施される。口縁部内側端部には沈線が施され、高台の断面形が低い逆三角形を呈する。胎土は密で、焼成は良好。色調は暗灰色を呈する。第Ⅱ段階B型式に位置付けられる。12は復元口径15.0cmで器高は5.0cmである。外面にはやや粗い分割ミガキが施されているが、内面のミガキは密で、見込みには連結輪状のミガキが施される。口縁部内側端部には沈線が施されており、高台の断面形が低い

逆三角形を呈する。胎土は密で、焼成は良好。色調は内外面ともに暗灰色を呈する。第Ⅱ段階B型式に位置付けられ、時期は11、12ともに12世紀前半から中頃と考えられる。

今回の調査では、まず、周濠の埋没時期は第9調査区周濠埋土から出土した須恵器から7世紀前半と考えられ、これまでの調査結果を追認できた。つぎに、第8調査区から中世土器が多く出土した。とくに土坑SK01、SK04、SK05から出土した土器から、12～13世紀に時期を特定できたことが重要である。

(桑原一徳)

5 木製品 (図11、図版8-7・8)

第9調査区の上層池から、ほぼ完形の下駄が1点出土した。法量は長さ20.4cm、幅8.4cmで、

前緒穴周辺に指圧痕が見られる。木取りは板目材である。

下駄には一木で作られる連歯下駄と、台部と歯部が別材で作られる差歯下駄がある(下津1996)。今回出土したものは、一木作りの連歯下駄である。草戸千軒町遺跡出土下駄の分類のAⅠb類に相当し、13世紀中頃から14世紀後半と考えられる(市田1982)。

(岡 紗佑里)

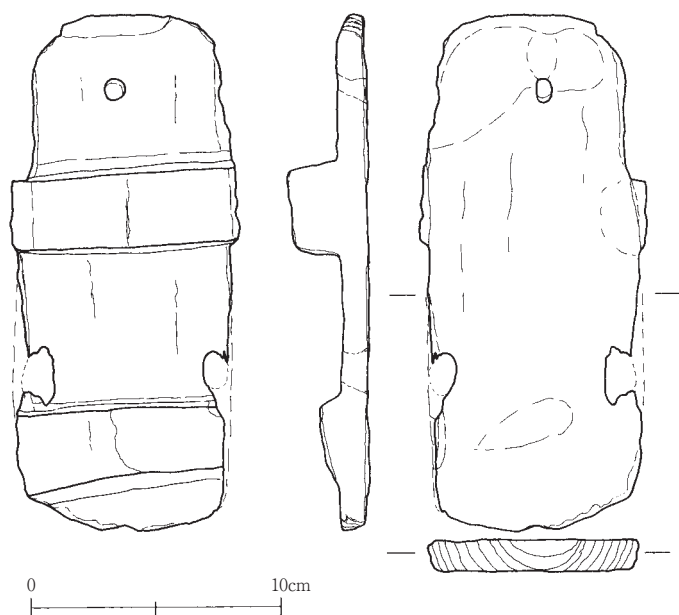


図11 木製品実測図 1:3

第5章 総 括

今回の調査では、斑鳩大塚古墳の墳形と規模の解明を目指し、2014年度に確認したくびれ部付近を中心に調査区を設定した。最後に、調査の成果について総括したい。

墳形と規模 第8調査区で検出した前方部状の張り出しは、部分的な検出に留まったものの、上面で幅約11.6m、長さ約3.6mの規模であると考えられる。張り出し部は当初の想定よりも短く、前方部というよりは造り出しと呼ぶのがふさわしい。造り出し前端から東側周濠の端までは約4.4mである。第1調査区では周濠SD01の幅は約8mあることが判明しており、造り出し付近では周濠の幅が狭いことがわかる。今回検出した周濠が第5調査区の検出範囲とどのようにつながるのか、造り出し北東端部の確認とともに、今後の調査で解明する必要がある。

第8調査区の南半部では墳丘裾付近の円弧を検出し、本来の墳端は残存する墳丘よりも外側にあることが判明した。1954年の調査では斑鳩大塚古墳は直径35mの円墳と推定されたが、円墳であるとしても、墳丘規模は当初の推定よりも確実に大きくなる。今後、別の場所で墳端を確認すれば、正確な規模を割り出すことができる。

墳丘南側の周濠 墳丘南側の第9調査区では、北側に中～近世の池SG01が掘削されており、周濠の確認は狭い範囲に留まった。さらに、池の南側には中世の土器を含む整地土を確認した。池と整地土は中世に成立した福安寺とそれを囲む濠跡との関連が想定される。墳丘南側における周濠と、池や整地土と福安寺の関連性は、今後の調査で解明すべき課題である。

出土遺物 今回の調査でも多くの埴輪片が出土した。埴輪には朝顔形埴輪を含む円筒埴輪と形象埴輪がある。円筒埴輪は外面にヨコハケ調整を施し、突帯の突出度は低い。焼成は土師質で、川西宏幸編年のⅢ期に位置づけられる（川西1978）。また、形象埴輪には蓋形埴輪があり、細部の特徴から小栗明彦編年の3段階に位置づけられる（小栗2007）。

なお、円筒埴輪のうち器壁が薄く、調整が丁寧で、焼成が良好なものは、蓋形埴輪とともに第8調査区の造り出し付近から出土した。このことは、造り出しに円筒埴輪の優品や形象埴輪が樹立された可能性を示唆する。

第8調査区では、土坑や遺物包含層から多くの瓦器碗が出土した。それらは12世紀から13世紀に位置づけられ、中世における土地利用の活性化が窺える。

今後の課題 以上のように今回の調査成果を総括した。次回の調査に向け、残された課題を挙げておきたい。

まず、造り出しの正確な規模と構造の解明である。今回の調査では調査区の制約と土坑による破壊によって造り出しの南東隅部を確認できなかった。今後、北東隅部の想定位置に調査区を設け、造り出しの規模と構造を検討したい。

つぎに、周濠の形態と規模の解明である。昨年度の第5調査区の成果によれば、墳丘北東部の周濠は単なる円形ではない可能性がある。造り出しの北東隅部とともに、その付近における周濠

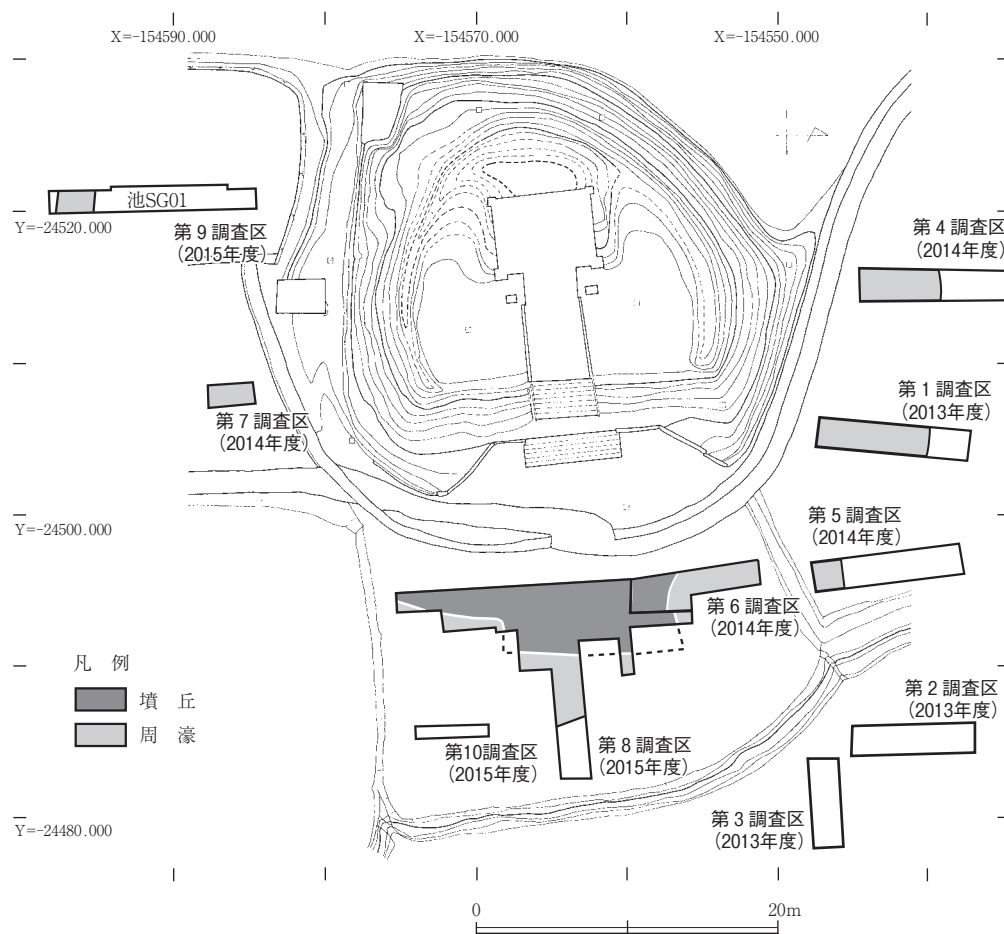


図13 墳丘・周濠の確認範囲 1 : 500

の範囲を確認する必要がある。墳丘南側の周濠は、第9調査区では部分的な確認に留まった。昨年度の第7調査区では、調査区全体が周濠に入ると結論づけた。しかし、第7調査区の周濠は池SG01である可能性がある。今後、墳丘の南側に別の調査区を設定する必要がある。

さらに、墳丘西側はこれまで未調査である。地中レーダー探査によれば、墳丘西側の水田下に強いレーダーの反射があり、墳丘基底部と周濠が残存する可能性が高い。今後、墳丘西側にも調査区を設定し、古墳の全体像の解明を目指したい。
(豊島直博)

参考文献

- 秋山日出雄編 1985『大和国古墳墓取調書』由良大和古代文化研究協会
- 荒木浩司 2007「駒塚古墳（01－1次）調査」荒木浩司編『斑鳩町内遺跡発掘調査概報 平成13（2001）年度』斑鳩町教育委員会
- 荒木浩司 2011「駒塚古墳（02－1次）調査」平田政彦編『斑鳩町内遺跡発掘調査概報 平成14（2002）年度』斑鳩町教育委員会
- 斑鳩町教育委員会 1998「五百井遺跡（97－1次）の調査」『平成9年度 奈良県内市町村埋蔵文化財発掘調査報告会資料』奈良県内市町村埋蔵文化財担当者連絡協議会
- 斑鳩町史編集委員会 1963『斑鳩町史』斑鳩町役場
- 斑鳩町史編集委員会 1979『斑鳩町史』本編 斑鳩町役場
- 泉森 皎編 1977『竜田御坊山古墳 付 平野塚穴山古墳』奈良県立橿原考古学研究所
- 市田京子 1982「草戸千軒町遺跡出土の連歯下駄」『草戸千軒』No.111 広島県草戸千軒町遺跡調査研究所
- 伊野近富 1995「土師器皿」中世土器研究会編『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社
- 梅澤あゆみ・清水早織・中村 真・豊島直博 2014「斑鳩大塚古墳測量調査報告」『文化財学報』第32集 奈良大学文学部文化財学科
- 大宮守人 2004「斑鳩町竜田神社の氏子区域にみる祭礼の諸相―服部と北庄の場合―」白石太一郎・村木二郎編『国立歴史民俗博物館研究報告』第112集 国立歴史民俗博物館
- 小栗明彦 2007「蓋形埴輪編年論」『埴輪論考Ⅰ』大阪大谷大学博物館
- 勝部明生ほか編 1990『斑鳩藤ノ木古墳第一次調査報告書』斑鳩町・斑鳩町教育委員会
- 川越俊一 1983「大和地方出土の瓦器碗をめぐる二・三の問題」『文化財論叢』奈良国立文化財研究所
- 川西宏幸 1978「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』第64巻第2号 日本考古学会
- 河上邦彦・関川尚功 1977『斑鳩・仏塚古墳』斑鳩町教育委員会
- 北野耕平 1958「斑鳩大塚古墳」『奈良県史跡名勝天然記念物抄録』第十輯 奈良県教育委員会
- 酒井龍一 2006「聖徳太子の都市計画―斑鳩の里で太子の髭に逢い―」『文化財学報』第23・24集 奈良大学文学部文化財学科
- 下津間康夫 1996「履物類の様相―下駄・草履状木製品―」岩本正二編『草戸千軒町遺跡発掘調査報告Ⅴ』広島県草戸千軒町遺跡調査研究所
- 関川尚功編 1976『斑鳩町 瓦塚1号墳発掘調査概報』奈良県教育委員会
- 田辺昭三 1966『陶器古窯址群Ⅰ』平安学園考古学クラブ
- 豊島直博編 2015『斑鳩大塚古墳発掘調査報告書Ⅰ』奈良大学文学部文化財学科
- 豊島直博・間所克仁編 2016『斑鳩大塚古墳発掘調査報告書Ⅱ』奈良大学文学部文化財学科
- 平田政彦 2008『史跡藤ノ木古墳 保存整備事業報告書』斑鳩町教育委員会
- 平田政彦 2013「春日古墳墳丘測量調査報告」『斑鳩文化財センター年報』第2号 斑鳩町教育委員会・斑鳩町文化財活用センター
- 平田政彦 2014「瓦塚古墳群航空レーザー測量調査報告」『斑鳩文化財センター年報』第3号 斑鳩町教育委員会・斑鳩町文化財活用センター
- 藤井利章 1986『奈良県斑鳩町 酒ノ免遺跡の研究』斑鳩町教育委員会
- 前園実知雄ほか編 1995『斑鳩藤ノ木古墳第二次・三次調査報告書』斑鳩町・斑鳩町教育委員会
- 森 隆 1995「黒色土器」中世土器研究会編『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社